

## 「そうじ」について ⑤

これまで「そうじ」(そふじ、そふち、そふぢ)という言葉に着目して一号から十五号まで見てきた。最後に十六号と十七号を見ていきたい。

十六号では、14からの一連の歌に「そふぢ」という語が見られる。すなわち、この度の親神の残念さは心の底からのものであり(14)、このもどかしさをどのようなかたちでも返すから(15)、親神からのそうした返報が現れてきたならば、「心のそうじ」はおのずと出来ていくであろう(16)と詠われて、続けて、今まではどのようなことも見許してじっとしてきたが(17)、今日の日時は時が熟したから、積日の思いをすぐに返す(18)と諭されている。

このたびのざねんとゆうわしんからや  
これをはらするもよふないかよ (十六号 14)  
このことを神がしいかりひきうける  
どんなかやしもするとをもゑよ (十六号 15)  
このかやしみへたるならばどこまでも  
むねのそふぢがひとりだけで (十六号 16)  
いま、でハとのよな事もみゆるして  
ちいとしていた事であれとも (十六号 17)  
けふの日わもふひがつんであるからな  
とんな事でもすぐにかやすで (十六号 18)

また、56からの一連の歌では、この道がどういうことになるのか今日までは何も知らないでいたが、さあ大きな楽しみが見えてきた(56)、この道はどんな道かと思っているか、世界中の人々の心をそうじする道である(57)。それは親神のもどかしさを晴らすことであり(58)、どこの者であってもその胸の内を親神は確かに見ているから(59)、今日から親神がみずから進み出て働きかけるのは、どんなことをするか分からない(60)。

けふまでわなにもしらすにいたけれど  
さあみへかけたゑらいたのしみ (十六号 56)  
このみちハどんな事やとをもうかな  
せかい一れつむねのそふぢや (十六号 57)  
この事ハなんの事やとをもっている  
神のざねんはらす事やで (十六号 58)  
このさきハとこの人ともゆはんてな  
むねのうちをばみなみているで (十六号 59)  
けふからわ月日でかけるはたらきに  
どんな事をはするやしれんで (十六号 60)

9からの一連の歌では、人間を創めかけた証拠として甘露台を据えておくが(9)、その台がすべて揃うまでに、世界中どこまでも「心のそうじ」をしなければならぬ(11)、そのことに関してはどこにも分け隔てはなく、どんな所にいる者の心のあり方を親神は見分けて(12)、各人の心通りに受け取る(13)と詠われている。

にんけんをはじめかけたるしよこふに  
かんろふたいをすゑてをくぞや (十七号 9)  
このたいがみなそろいさいしたならば  
どんな事がかかなハんでなし (十七号 10)  
それまでにせかいぢううをとこまでも  
むねのそふぢをせねばならんで (十七号 11)

このそふぢとこにへだてハないほとに  
月日みハけているとをもゑよ (十七号 12)  
月日にハどんなところにいるものも  
心しだいにみなうけとるで (十七号 13)

また、49からの一連の歌では、親神にとって世界中の人間は我が子として可愛いばかりであり(49)、それゆえに世界中のどこまでも「心のそうじ」をしたいと思っているのだが(50)、この「心のそうじ」をどういうことに思っているのか、それは救いたい一心からであり(51)、そうして救かるのは、ただ悪いところを治すだけではなく今までにないような珍しい救済であり(52)、それは病まない、死なない、弱らないというもので(53)、このような救済を実現するという証拠を見せたいから親神は心を尽くしている(54)、この度これを親神は始めたいのである(55)。

月日にハせかいぢううのこどもわな  
かはいばかりをふもっているから (十七号 49)  
それゆへにせかいぢううをどこまでも  
むねのそふぢをしたいゆへから (十七号 50)  
このそふぢどふゆう事にをもっている  
たすけばかりをふもっているから (十七号 51)  
たすけでもあしきなをするまでやない  
めづらしたすけをもっているから (十七号 52)  
このたすけどふゆう事にをもうかな  
やますしなすによハリなきよに (十七号 53)  
こんな事いま、でどこにない事や  
このしよこふをしらしたさやで (十七号 54)  
これまでハどこたつねてもない事や  
このたび神がはじめたさやで (十七号 55)

そして、61からでは、これからは世界中どこまでも、高山でも谷底でも(61)、世界中の人間の「心のそうじ」をだんだんとすることを承知せよ(62)、この「心のそうじ」をなんと思っ  
ているのか、親神の思惑を誰も知らないだろう(63)と詠われている。

このさきハせかへぢううハとこまでも  
高山にてもたにそこまでも (十七号 61)  
これからハせかい一れつたんへと  
むねのそふぢをするとをもへよ (十七号 62)  
このそふぢなんとをもうぞみなのもの  
神の心をたれもしろまい (十七号 63)

このように十六号・十七号では、「心のそうじ」は世界中の人間に分け隔てなく促されており、そうした「心のそうじ」の進み具合に応じて実現されていく救済はこれまでにないような珍しいものであり、親神はそれを大きな楽しみとされていることが読み取れる。世界のどこにいる者であっても、その者の心のあり方を親神は見分けて、それ相応の働きを返す。ときには、その者にとって辛く切ないような事柄が起きるかもしれないが、そこにはその事柄を通して「心のそうじ」を促されている親神の意図が込められており、我が子に対する切々たる親心とともに、「うち」から「せかい」へと救済が及んでいく楽しみが表されているといえよう。